



Philosophy Thought and Culture

哲学・思想文化学専修

哲学は諸学の基礎の基礎に位置する学問です。例えば、何かが「存在する」とはどういうことか。「意味する」とはどういうことか。意見が違うのに、違うということだけは一緒に確認できてしまうのはなぜか。根拠付けができたためしがないのに、なぜ現実崩壊せず歴史は終わらないのか。そして、こんなことを問うているのは、心なのか脳なのか何なのか。哲学はこうした問題に取り組んできました。あまりに基礎的なので、現在でもこれに代わる分野は他にありません。

私たちの専修では、西洋の近世から現代までの哲学思想の研究を行っています。教員は全員古典と現代哲学思想の両方に通じ、専門領域をあわせるとドイツ系、フランス系、英米系のすべてをカバーしています。私たちは「なぜ」という疑問をとことん考えるための手ほどきと時間を提供し、助けます。

教員

なかむら・まさき
中村征樹 教授
ふなば・やすゆき
舟場保之 教授
もちづき・たろう
望月太郎 教授
こかど・みのり
小門穂 准教授
よしめ・みちひと
嘉目道人 准教授
みき・なゆた
三木那由他 講師
よねだ・めぐみ
米田 恵 助教

<https://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy/>

何を学んでいるの？

哲学の基礎 A

ひとりの哲学者が書いた論文を手がかりにして、ギリシア哲学—中世哲学—近代哲学—現代哲学と、どのような問題がどのように引き継がれ、どのような回答が与えられてきたのかを振り返りながら、自分自身で考えることの重要性を学びます。

哲学の基礎 B

われわれにとって身近ではあるけれどもつかみがない「私」ないし自我の概念が、デカルト以降の西洋哲学においてどのように論じられてきたのかを紹介することを通じて、哲学史における問題意識の変遷を浮き彫りにします。

どんな授業があるの？

【講義題目】

西洋哲学通史
生殖技術と倫理
「ある」の探究 近代
カントの平和論

【演習題目】

パース著作集を読む
科学技術社会論文献講読
ドイツ哲学基本文献講読
論理学初級

教員が選ぶ印象に残った卒業論文

リベラリズムにおける寛容への批判

J.ロールズに代表される現代のリベラリズムが、政治的に解決されるべき差異を私的領域における本質的な差異として捉え、その対処を寛容に委ねている点を批判的に考察するとともに、こうした本質主義を脱構築する公的領域の形成に向けた提言が行われる、非常に優れた論文。(選：舟場保之 教授)

【卒業論文題目】

裁判外紛争解決手続きへのAI導入の課題
コミュニケーションはなぜ失敗するのか
人権の根拠付け——ケーラーとアレント
「哀悼可能性」概念と非暴力

自分の頭で深く考えたい人はぜひ来てください。

学生インタビュー

なぜこの専修を選びましたか？

T.A 哲学というと、一つ一つの言葉を大事にして、深く読み込んでいくという感じがしています。そういう意味で一番細かい議論をする学問だと思います。より深いところ、理論のようなところをしっかりと勉強したいと思い、哲学・思想文化学専修を選びました。

それは例えば何についての理論ですか？

T.A 例えば、「自由」についてです。そもそも自由なんてものがあるのか、からはじまって、ないとしたら、どうして私たちは自由があるような気がしてしまうのか、までです。

普段当たり前に使っている基礎的な言葉の意味にまで遡って考えることが哲学なのだと思います。

「自由」といった哲学の問題をどのように研究していますか？

T.A 今は哲学者の書いた本を読んです、その哲学者について研究しています。原書を読むために語学を勉強したり、他の授業もあるので、今は自分の問題としたいテーマを直接に扱うための準備をしているという感じです。

A.N 研究室にはアレント、ウィトゲンシュタインなど特定の哲学者について研究している人もいますが、「自由」を主題として複数の哲学者を

研究する人もいます。

最後に研究室の雰囲気をお話してください。

T.A 真面目な人が多いような気がします。実際、専修イメージランキング(『文学部紹介2013-2014』)では、「真面目な人が多そうな専修」で、ぶっちぎりの1位でした。

A.N それは、あくまでも「多そう」だから(笑)。

T.A 一匹オオカミは多いかもしれませんが。ただ、大学院生も多く在籍していて、語学や研究のことでいろいろ教えてもらうことができますし、また読書会も多く開かれていますので、研究するには良い環境です。



研究室に関わる書籍をご紹介します。

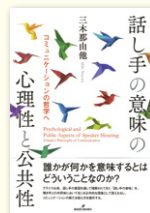
書籍紹介



『超越論的語用論の再検討』

嘉目道人：著／大阪大学出版会／2017

アペルが提唱した超越論的語用論は、現代ドイツ哲学の言語論的転回を主導したことで知られていますが、「究極的根拠付け」を重視するその思想は多くの批判も受けました。本書はフィヒテ哲学との関連から、超越論的語用論の擁護を試みています。



『話し手の意味の心理性と公共性』

三木那由他：著／勁草書房／2019

コミュニケーションとはいったい何でしょうか？ 改めて考えると、これはなかなか難しい問題です。グライスという哲学者は、この問題に話し手の意図という観点から答えようとしてきました。本書では、そうしたグライスの議論の問題を指摘し、まったく別のコミュニケーション観を提示しようとしています。



『メタフシカ』

『Philosophia OSAKA』

哲学・思想文化学専修では、『メタフシカ』を年1回発行しています。教員だけでなく、大学院生が研究成果を発表する貴重な場となっています。また、海外に向けて研究成果を発信するために、欧文雑誌『Philosophia OSAKA』を発行しています。

